

## 小児看護学実習における「関係作り」に関する学生の 自己評価と記述内容の分析

小川佳代\*, 三浦浩美, 舟越和代

香川県立医療短期大学看護学科

### Analysis of Self Evaluation and Descriptive Contents of Students' Reports "Making of a Relationship with a Sick Child" in Pediatric Nursing Training.

Kayo Ogawa\*, Hiromi Miura, Kazuyo Funakosi

*Department of Nursing, Prefectural College of Health Sciences*

#### Abstract

As a result of having compared the self evaluation of students and faculties' evaluation and analyzed free descriptive contents, I understood the following things.

1. There are more than 30% of students who evaluated themselves lower than faculties did about "Making of a relationship with a sick child and their family."
2. These students tended to evaluate "development of a nursing process" or "practice of nursing technology" lower than faculties' evaluation. About 1/3 expressed they were "not able to" in the description contents.
3. The students whose evaluation of "making of a relationship" was higher than the faculties' evaluation tended to evaluate other evaluation items highly as well. Most of their descriptive contents were "able to."
4. Self evaluation of "making of a relationship" in pediatric nursing training, and lessons as well as advice to deepen the relationship with a sick child and their family are effective for self education empowerment.

**Key Words :** 小児看護学実習 (Pediatric Nursing Training)

関係作り (Making of a Relationship)

学生の自己評価 (Self Evaluation of Students' Reports)

記述内容 (Descriptive Contents)

\*連絡先：小川佳代 〒761-0123 香川県木田郡牟礼町大字原281-1 香川県立医療短期大学看護学科

\*Corresponding address : Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences,  
281-1 Hara, Mure-cho, Kita-gun, Kagawa, 761-0123, Japan

看護学教育の中で実習は大きな比重を占めており、学生が対象者との関わりを通して質の高い体験ができるように指導していく必要がある。しかし、昨今の学生は、子どもやその家族との関わりの体験の少なさによって、小児看護学実習を効果的に展開するための関係作りにつまづきを感じてしまい、実習を有意義に活用できずに終わっている場合がある<sup>1,2,3)</sup>。最近、この分野に関する研究において、その問題点が指摘されてきており、対象者との関わり方に関する自己評価の活用について検討する必要性を述べている<sup>4)</sup>が、その研究報告の数は少ない<sup>5)</sup>。そこで、実習を終えた後の学習到達度の自己評価のうち、「関係作り」の項目と、学びがどのように関連しているかを分析し、学生の自己評価を学習のプロセスとして位置づけ、より効果的な実習展開のできる指導方法を見直すことを本研究の目的とした。

### 本学小児看護学実習の概要

本学の小児看護学実習（2単位）は、基礎看護学実習に続く、各領域別看護学実習の一つとして位置付けられ、3年次通年で実施している。小児看護学実習は「各成長発達段階にある小児の健康上の諸問題を総合的に理解し、小児とその家族に対する看護を実践する基礎的能力を養う。」ことを目的とし、実習期間2週間の学習内容とその評価方法を定めている。また、健康な小児の生活の援助については、在宅看護学実習Ⅱ（1単位）の中に位置付け、「地域で生活する妊産褥婦及び乳幼児とその家族への看護を学ぶ」ことを目的として実施している。実習期間中、学生は患児を1人受け持ち、関わりを通して看護過程の展開を実施し、記録物を提出させることを課している。

#### <用語の用い方>

本来、対象者は「子ども」として表現されることが多いが、本論文において、小児看護学実習の対象者である子どもは入院中の病気のある子どもを指しているため、「患児」という用語を用いた。また、カリキュラム上は一般的に使用されている「小児」を用いた。

#### 1. 調査期間

2001年4月～12月

#### 2. 対象

短期大学3年次の小児看護学実習を終えた学生46名（対象学年は女子のみであった）。

#### 3. 方法

小児看護学実習の成績評価は、教員が独自に作成した「小児看護学実習教員評価表」（以下、教員評価表）を使用した。評価表の信頼性を確保するために、臨床実習指導者及び本学助手の意見を参考にし、担当教員2名の協議によって行なった。

学生には、実習開始前に学習レディネスの確認のために(1)自己学習課題、(2)現在の気持ちや不安なこと、(3)小児看護学実習に活かせる自己PRの3項目で構成した「実習にあたって」を記載させた。また、「実習自己評価表」及び「実習を終えて」は、実習終了後の面接の資料として、学生自身に実習の振り返りをさせるため、また教員自身の指導の自己評価に活用した。

実習自己評価表と教員評価表のうち、共通の評価項目は関係作り(10点)、看護過程の展開(30点)、技術の実践(20点)、実習態度(20点)の4項目であり、各々「できる」、「指導・助言があればできる」、「できない」の3段階とした。そのうち「関係作り」は、(1)患児の年齢（発達段階）を考慮した関わりができる、(2)患児の病状を考慮した関わりができる、(3)患児との関わりで観察したこと、感じたことを適切に表現し、客観的に判断できる、(4)患児の母親および家族と関わる事が出来るの4項目である。

「実習を終えて」は、(1)今回の実習の自己学習課題は達成できたか、(2)実習を通じての反省・感想、(3)今後の課題、実習に関する要望の3項目である。

今回の研究の方法は以下の通りである。

- 1) 評価表の「関係作り」の4項目について、教員と学生の自己評価得点を比較し、(A)教員評価に比べて、自己評価が低かった学生、(B)教員評価に比べて、自己評価が高かった学生、(C)教員評価と同等の自己評価をした学生の3群に分類した。
- 2) 3群に分類した学生の「実習を終えて」の自由記述内容について、一内容1項目として抽出、カテゴリー化した。分析は妥当性を確保するた

め、全教員間の一致によることとした。今回の内容分析は、(1)および(2)の記述内容を用いたが、(1)と(2)の設問の意図が理解できなかったのか、分類を様々にして記載していたので、両方をまとめて、学んだことや課題の達成状況として分析を行った。

#### 4. 倫理的配慮

「実習にあたって」、「実習自己評価表」、「実習を終えて」の記入内容は成績評価には影響しないことを説明した。分析にあたっては研究目的と方法について文書で説明し、研究目的以外にデータを使用しないことを伝え、同意が得られた学生を対象者とした。また、データは対象者が特定出来ないように配慮した。

## 結 果

小児看護学実習の教員評価と学生の自己評価の比較によって分類した(A)(B)(C)群の分類結果およびその記述内容について、(A)教員評価に比べて「関係作り」の自己評価が低かった学生は、15名(32.6%)であった。そのうち、「関係作り」のみ自己評価が低かった学生は15名中4名で、11名は他にも自己評価が低い項目があった。

15名のうち、「実習を終えて」の記述のあった14名分について内容分析を行った結果、総記述数は90であった。

そのうち「出来た」、「わかった」と表現したのは記述数56(62.2%)であり、以下の通り9つにカテゴリー化された。「入院が及ぼす影響について考えることが出来た」などで構成された(1)入院が及ぼす影響の理解、「見学や観察で知ることが出来た」、「入院前の生活習慣も理解した上でケアすることが必要」などで構成された(2)患児の生活の援助、「発達段階を理解してケアプランが立てられた」などで構成された(3)発達段階の援助、「年齢に応じた遊びの特徴を知ることが出来た」などで構成された(4)遊びの援助、「母子関係について考えることが出来た」などで構成された(5)母親・家族への介入、「健康を障害された患児への援助が出来た」、「看護計画を立てられた」などで構成された(6)看護過程に関すること、「点滴・吸入・清潔などの看護技術は実施できた」などで構成された(7)看護技術の理解、「低出生体重児の身体的・生理的特徴を理解できた」などで構成された(8)低出生体重児の理解、「充実感があった」などで構成された(9)自分の思い・

行動の振り返りであった(表1)。

反対に、「出来なかった」、「わからなかった」と表現したのは記述数34(37.8%)であり、以下の通り8つにカテゴリー化された。「どう関わったらいいかわからなかった」、「ケアを通しての関わりがあまり出来なかった」などで構成された(1)患児との関わり、「発達段階はあまり理解できなかった」などで構成された(2)発達段階の援助、「遊びの工夫ができず同じようなことばかりになった」などで構成された(3)遊びや学習の援助、「母親と関わる事が出来なかった」、「母親の心理面を聞くことが出来なかった」で構成された(4)母親との関わり、「情報収集とそれをまとめるのに時間がかかりすぎた」、「看護計

表1 「関係作り」の評価が教員評価に比べて低かった学生の、「実習を終えて」の自由記述内容において、『出来た』、『わかった』と表現した項目

カテゴリー	主 な 記 述 内 容	項目数
(1) 入院が及ぼす影響の理解	・入院が及ぼす影響について考えることが出来た ・入院が家族と患児にどのような影響を与えているか理解できた ・入院が患児の成長発達に及ぼす影響がわかった	7
(2) 患児の生活の援助	・患児の生活への援助は、見学や観察で知ることが出来た ・入院前の生活習慣も理解した上でケアすることが必要と感じた ・入院すると勉強が遅れるのを心配するが、学習習慣を失わせないことが大事だとわかった	5
(3) 発達段階の援助	・病気により発達に影響を与えることがあることを実感した ・入院していても成長発達を阻害しないように伸ばすことが大切 ・発達段階を理解してケアプランが立てられた	8
(4) 遊びの援助	・年齢に応じた遊びの特徴を知ることが出来た ・成人とは違って遊びを考えることが出来て良かった ・遊びを通して親しくなれた	3
(5) 母親・家族への介入	・母子関係について考えることが出来た ・母親への看護介入の必要性を知った ・不安やストレスを軽減するために傾聴したり、子どもと関わることで家族の疲労を軽減できると思った	9
(6) 看護過程に関すること	・健康を障害された児への援助が経験できた ・看護計画を立てることが出来た ・小児は観察が重要で、機嫌や表情もその一つだとわかった	3
(7) 看護技術に関すること	・点滴・吸入・清潔・遊びなどの看護技術は実施できた ・経管栄養や輸液などを細かく教えてくれてわかりやすかった ・患児の検査・処置の看護は見学や観察で理解できた	4
(8) 低出生体重児の理解	・未熟児室の無菌操作など教科書に載っていないことが学べた ・未熟児室で細やかな看護の必要性、重要性を学んだ ・低出生体重児の身体的・生理的特徴を理解できた	8
(9) 自分の思い・行動の振り返り	・充実感があった ・小児が好きなので興味もあった ・実習はとても楽しく行うことが出来た	9
	計	56

表2 「関係作り」の評価が教員評価に比べて低かった学生、「実習を終えて」の自由記述内容において、『出来なかった』『わからなかった』と表現した項目

n=14		
カテゴリー	主 な 記 述 内 容	項目数
(1) 患児との関わり	・入院や病気のことを患児自身がどう思っているか聞けなかった ・ケアを通しての関わりがあまり出来なかった ・どう関わったらいいのかわからなかった	6
(2) 発達段階の援助	・受持ち患児では、発達段階はあまり理解できなかった ・年齢が一つ違うだけで発達段階が異なるため、接し方が難しかった ・成長発達を促す援助は実施できなかった	3
(3) 遊びや学習の援助	・遊びの工夫が出来ず、同じようなことばかりになった ・学習への働きかけが出来なかった	2
(4) 母親との関わり	・母親と関わる事が出来なかった ・母親の心理面を聞くことが出来なかった	2
(5) 看護過程に関すること	・情報収集とそれをまとめるのに時間がかり過ぎた ・看護計画を十分に実施できなかった ・看護計画のケアプランに具体性や個性がなかった	10
(6) 看護技術に関すること	・技術がスムーズに出来なかった ・小児特有の技術は助言がないと出来なかった ・処置の実施は少し積極性が欠けていた	3
(7) 学生自身の意欲・態度	・自分で進んで実習することが出来なかった ・学習が不充分だった ・ナースの質問に答えられなかった	5
(8) 患児に対する学生の思い	・病気で苦しんでいる患児さんを見ていて、辛くて出来なかった ・子どもの頃当たり前のように遊んでいた自分と比べた	3
計		34

画を十分に実施できなかった」などで構成された(5)看護過程に関すること、「技術がスムーズに出来なかった」などで構成された(6)看護技術に関すること、「自分で進んで実習することが出来なかった」、「ナースの質問に答えられなかった」などで構成された(7)学生自身の意欲・態度、「病気で苦しんでいる患児さんを見ていて辛くてできなかった」などで構成された(8)患児に対する学生の思いであった(表2)。

(B)教員評価に比べて「関係作り」の自己評価が高かった学生は、5名(10.9%)であった。そのうち3名は他にも自己評価が高い項目があった。

5名分の内容分析を行った結果、総記述数21が抽出された。

そのうち「出来た」、「わかった」と表現したのは記述数20であり、以下の通り5つにカテゴリー化された。「発達段階、入院や健康障害による影響について理解が深められた」などで構成された(1)患児の理解、「積極的に働きかけることで心を開いてくれた」、「児の今必要なことを考え、計画表を作れた」などで構成された(2)患児との関わりや援助、

表3 「関係作り」の評価が教員評価に比べて高かった学生、「実習を終えて」の自由記述内容

n=5		
カテゴリー	主 な 記 述 内 容	項目数
(1) 患児の理解	・発達段階、入院や健康障害による影響について理解が深められた ・患児の精神面を含めて理解することができた	4
(2) 患児との関わりや援助	・積極的に働きかけることで心を開いてくれコミュニケーションを取ることができた ・患児の今必要なことを考え、計画表を作れた	5
(3) 家族(母親)との関わりや援助	・母親の存在は欠かせず、その情報を得ることができた ・母親に理解的、支持的態度で接した	3
(4) 看護技術の体験	・小児に必要な看護技術はよくできた	1
(5) 達成感・学び	・全部達成できた ・発達段階についてカンファレンスなどから学びを共有できた	7
計		20

「母親に理解的・支持的態度で接した」などで構成された(3)家族(母親)との関わりや援助、「小児に必要な看護技術はよくできた」という記述から(4)看護技術の体験、「全部達成できた」などで構成された(6)達成感・学びであった(表3)。

残りの記述も「入院患児が少なく、小児特有の疾患が見られず心残り」という内容であり、「出来なかった」という内容ではなかった。

(C)「関係作り」の自己評価が、教員評価と同等であった学生は、26名(56.5%)であった。そのうち19名は他にも、教員評価と同等の評価が見られた。

記述のあった23名分の内容を分析した結果、総記述数は145であった。そのうち「出来た」、「わかった」と表現したのは、記述数115(79.3%)であり、「出来なかった」、「わからなかった」と表現したのは記述数30(20.7%)であった。

## 考 察

教員評価に比べて「関係作り」がうまくいかなかったと自己評価した学生は、他の学生に比べて「出来なかった」、「わからなかった」と表現した記述が多かった。それらの学生は、達成感が得られず不満足のまま実習を終えた可能性があり、客観的に到達度を把握し、次の学習目標を設定するにあたって問題があるといえる。特に、近年の少子化によって日常の中で子どもと関わりを持つ機会が減少したことによって、その方法がわからないまま実習を体験することになり、また、疾患も多岐にわたる上に、昨今の入院期間の短縮傾向などによってますます小児の理解が困難になり、患児や家族との関係作りがスムーズにいかない学生もみられる<sup>6,7)</sup>。

今回、教員評価に比べて「関係作り」の自己評価が低い学生が全体の3割以上を占めていることが明らかとなり、それらの項目の自己達成感が低いことが示唆された。関係作りのためには、患児とその家族とのコミュニケーションのあり方が重要となるが、小児は言語的コミュニケーションが十分でない上に、感情をストレートに表現し、学生が戸惑う場合もたびたびある。また、子どもの病状に一喜一憂し不安な母親や家族にどのように声を掛ければよいかと悩み、関係が作れずに実習を終えてしまったということも考えられる。また、それらの学生の記述内容を通して、看護過程の展開や看護技術に関するもの、実習態度に関するものなど他の評価項目についても「出来なかった」という記述が多く見られた。つまり、「関係作り」の項目の自己評価が教員評価より低い学生は、それ以外の項目の自己達成感も低いことを示唆しているのである。小児看護学実習において、患児やその家族との関係作りは効果的な看護援助のためには必要不可欠かつ重要な要素であり、それが不十分だと自己評価したことは、看護過程の展開や技術の実践あるいは実習全体の態度にまで影響を及ぼしたといえ、実習全体の達成感が十分得られずに終わっていたと考えられる。

しかし、一方、「関係作り」の自己評価が低い学生の記述内容の中で、「出来た」、「わかった」と表現した項目にも、同様に、患児や家族との関係作りだけでなく、看護過程の展開や看護技術の実施が出来たなど、幅広い内容の記述が見られた。関係作りはうまくいかなかったと自己評価しつつ、入院した患児の理解や、具体的な入院生活への援助や遊びへの援助を通して患児に関わろうとしたり、看護過程の展開や看護技術の習得などを通して学びを得ようと努力した結果だと考えられる。教員評価は、学生のそれに比べて高かったので、学生自身が捉えているよりは患児や家族の反応もあり、達成感は得られていたと考えられる。つまり、小児が苦手だとか、うまく遊べないなどの不安が強く、関係作りに躊躇する学生には、清潔援助などの具体的な生活援助やバイタルサインの測定などの看護技術の実施などを通して、徐々に関わる時間を持たせることが自信にも繋がり、達成感も得られやすいことが示唆された。

また、記述の中で「遊びや学習への援助」は、「出来た」と表現したものと「出来なかった」と表現したものの両方が見られた。患児との関わりをスムーズにするためには、対象者の関心の高い遊びや学習を通じた援助の工夫が効果的であり<sup>6)</sup>、患児の

個別性の理解にも繋がる。それは同時に学生自身の気分転換にもなり、患児やその家族との相互作用による効果が高まるのではないかと考える。つまり、関係作りは不十分としながらも、遊びや学習への援助が出来たと捉えられるということは、関わりの一歩として評価できるものである。今後、遊びや学習を通じた患児との関わり方についての助言を工夫していく必要がある。

また、「看護過程の展開」を不十分だと捉えていることがわかったが、それにも関わらず学生は多くの時間を看護記録に割いているという現状もある<sup>6)</sup>。その記録からは、患児と学生のダイナミックな関係を通じた学びが伝わってこず、実際には患児の状態に合わせて遊びや援助を工夫していると思われるのに、マニュアル的な援助計画の記録に終わっていると考えられる。そのことが個別性への配慮が足りなかったとか、援助が出来なかったという反省にも繋がっているように思われる。体験した看護援助の過程を記録に活かすための具体的な指導によって、もっと達成感を高めることは可能ではないかと考える。そのためには、学生が患児やその家族とどのように関わっていて、どのような援助が出来ているのか、あるいは出来ないでいるのかについて、教員がきちんと受け止め、タイミングよくそれを学生にフィードバックしていくことが必要である。

一方、教員の評価に比べて自己評価が高い学生は、「全部達成できた」や「技術はよく出来た」、「自分なりに出来た」などの記述内容の表現からわかるように、自分を高く評価し、今後の課題に繋がるような具体的な記述は少ないことがわかった。そして、「出来なかった」、「わからなかった」と表現した内容が見られなかったことから、達成感が強く、自分の学びを肯定的に受け止められていることを示唆するものである。そして、教員評価より高く評価しているということは、客観的にみてその段階に達していないにも関わらず、自分はすでに到達していると捉えているということを意味する。自己評価のあり方は、その学生がどのような自我意識を持っているかによって異なると考えられている。望ましい自己評価のあり方とは、北尾<sup>8)</sup>によれば「何を学ぶかをきびしく自覚し、自ら工夫しながら学び、その過程や結果を自ら評価することができる」ということである。つまり、自分の到達している状況を客観的に評価し得ていない学生は、自己認識が育っておらず、自己を制御する力が伸びていないことを示していることになる。今後の学びのためには、自己を肯

定的にみる視点を維持しつつ、自らの課題を明確にするために具体的な目標の提示が必要と思われる。

しかし、これからの教育に求められているのは、与える教育ではなく、自らが「感じ、考え、行動する学習」のための教育だと言われている<sup>9)</sup>。つまり、それは、自ら問いかけ、考え、自ら開発し、創造し、行動できる学び方、さらに、生き方を学ぶことである。倉戸ら<sup>9)</sup>はそれを「自己教育力」といい、「何をいつ、どこで、どのように学ぶかを、自ら判断し、計画し、学ぶプロセスや成果を自己評価し、自己反省することから形成される」と述べている。実習はまさに自己教育力を高めることによって教育目標が達成される分野である。自己教育力育成のために、どのように自己評価を活用していくかが今後の課題である。

自己教育性調査表を用いた土屋ら<sup>10)</sup>の調査によると、実習で自己教育力がついた具体的な学習方法として最も効果があったのは「患者との関わり」で、2番目が「臨床指導者のアドバイス」、3番目が「教員のアドバイス」であったと報告している。つまり、自己教育力育成のために、患児との関わりがどうだったかを把握すること、そして、学生がそれをどのように自己評価したかということを検討することは意義があるといえる。よって、小児看護学実習においても、患児やその家族との関わりを中心にして、学生が満足できる実習を体験できるような指導が重要だといえる。また、学生と患児やその家族との「関係作り」だけでなく、学生の様々な人間関係における「関係作り」のためのサポートも、自己教育の側面である「自信・プライド・安定性」<sup>11)</sup>を支えることに繋がり、学生の自己教育力育成に大いに効果があると思われる。つまり、学生と受持ち児とその家族との関係だけでなく、学生と教員との関係、学生と臨床指導者との関係、学生同士の関係も信頼関係を保っていること、そして、自分の考えや判断で決定し行動できるという安心感を育てることも重要となる。

今回の記述には、医療関係者や臨床指導者、教員からの助言でわかったことや、ロールモデルとして捉えた学びはほとんどなかった。今後は、臨床指導者と十分に情報交換を行い、様々な場面で関係作りのための効果的なアドバイスが展開できるように工夫する必要がある。

## 結 論

小児看護学実習を終えた学生の自己評価と教員評価の比較、及び自己評価の方が低かった学生の自由記述内容を通して、以下のことが示唆された。

1. 患児やその家族との「関係作り」の項目を、教員評価より低く自己評価している学生が3割以上いる。
2. 「関係作り」の自己評価が教員評価より低い学生は、「看護過程の展開」や「看護技術の実施」など、他の項目も低く評価する傾向があり、その記述内容は「出来なかった」、「わからなかった」とするものが約1/3あった。
3. 「関係作り」の自己評価が教員評価より低い学生の記述内容のうち、「出来た」と表現したのが2/3程度に比べ、自己評価が高い学生の記述内容は、ほとんどが「出来た」、「わかった」と表現した内容であり、「出来なかった」と表現したものはなかった。
4. 学生に対して、患児への生活援助や看護技術援助などの具体的な指導や助言を行うことは、学生が患児やその家族との関わりを深める効果があり、それは、実習の達成感を高め、自己教育力育成にも繋がることがわかった。

## 文 献

- 1) 濱中喜代, 児玉千代子, 大木伸子, 日沼千尋, 大矢智子, 吉武香代子 (1996) 付添いのいる病院での小児看護学実習における看護ケアの経験と学び. 看護基礎教育の中の小児看護学の教育内容・方法に関する総合的研究. 平成5年-7年度 文部省科学研究費補助金 (一般研究C) 研究成果報告書, p72-82.
- 2) 大木伸子, 濱中喜代, 日沼千尋 (1998) 小児看護実習を問う. 小児看護 21:1650-1659.
- 3) 江本リナ, 長田暁子, 鈴木真知子, 安田恵美子, 飯村直子, 込山洋美, 筒井優美ほか (1999) 小児看護学実習を行う学生に関する研究の動向と今後の課題. 第30回日本看護学会集録 (看護教育): 32-34.
- 4) 伊藤久美, 飯村直子, 江本リナ, 安田恵美子, 阿部さとみ, 長田暁子, 込山洋美ほか (2001) 看護系大学における小児看護学実習の実態. 日本看護学教育学会誌 10 (4): 11-19.
- 5) 筒井真優美, 小村三千代, 飯村直子, 福地麻貴子, 込山洋美 (2000) 日本の小児看護に関する研究の動向と今後の課題. 看護研究 33 (6): 39-47.

- 6) 山本美佐子, 原沢茂美 (1997) 短期大学における小児看護学臨床実習での学生の学び—病棟実習 における学習効果の考察—。群馬県立医療短期大学紀要 4:99-111.
- 7) 園田悦代, 市島昭子 (1995) 小児看護実習の評価と指導の方向性。京都府立医科大医短紀要 5:69-74.
- 8) 北尾倫彦 (1985) 自己学習力を育てる自己評価。指導と評価。日本教育評価研究会 5:4-8.
- 9) 倉戸ツギオ, 鈴木直人, 三根浩 (1994) “学ぶ・教える・かかわる”, 北大路書房, p.3-11.
- 10) 土屋世都子, 衛藤英子, 菊池恭子, 杉本龍子, 鈴木良子, 並木弘美, 水吉征子 (1998) 看護学生3年生の自己教育力の構造とそれに影響する実習方法。第29回看護教育: 33-35.
- 11) 梶田勲一 (1994) “自己教育への教育”, 明治図書, p.37.

---

受付日 2002年12月2日